

Title	遍歴電子反強磁性体CrB <sub>2</sub> の熱膨張(金属間化合物の基礎磁性,科研費研究会報告)
Author(s)	西原, 美一; 徳本, 圓
Citation	物性研究 (1987), 48(1): A33-A34
Issue Date	1987-04-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/92437">http://hdl.handle.net/2433/92437</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 1. はじめに

通歴電子強磁性体の磁気体積効果<sup>1-4)</sup>に比べ、反強磁性体について調べた例は非常に少ない。われわれは、 $\text{CrB}_2$  および  $\text{MoB}_2$ ,  $\text{VB}_2$  との合金の熱膨張を測定し、 $\text{CrB}_2$  の磁気体積効果について検討した。

$\text{CrB}_2$  は六方晶  $\text{AlB}_2$  構造(C32)の通歴電子反強磁性体である。反強磁性転移温度  $T_N$  は 87 K にあり、磁気構造は 0.5  $\mu\text{B}$  の磁気モーメントが  $a$ - $c$  面内で回転しているサイクロイド構造である。<sup>5)</sup> 図1に示すように、 $\text{MoB}_2$ ,  $\text{VB}_2$  との合金では、 $\text{MoB}_2$  が ~60% を越えたところ、 $\text{VB}_2$  が 30% を越えたところで、常磁性体となる。

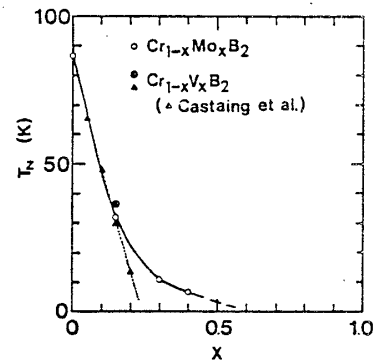


図1.  $T_N$  の濃度変化

## 2. 実験結果

### 2.1 格子定数の温度変化

常磁性試料の格子定数は  $a$ ,  $c$  とも温度上昇により単調に増加する。一方、反強磁性の試料では、図2の  $\text{CrB}_2$  のように、格子定数  $c$  が温度上昇につれて室温近くまで減少する。 $T_N$  の近くでは減少が急になり、 $T_N$  を越えたところでゆるやかになる。

$c$  と  $a$  の比は図3のような温度変化を示す。常磁性の試料では  $c/a$  は温度上昇とともにわずかに増加するが、反強磁性を示す  $\text{CrB}_2$ ,  $\text{Cr}_{0.85}\text{V}_{0.15}\text{B}_2$  では室温まで減少する。反強磁性転移温度においても、 $c/a$  にはほとんど変化が見られない。図3の結果から、反強磁性の試料は常磁性のものより  $c$  軸方向にのびていて、その磁気効果によりと見られるのびは常温まで残っていることがわかる。

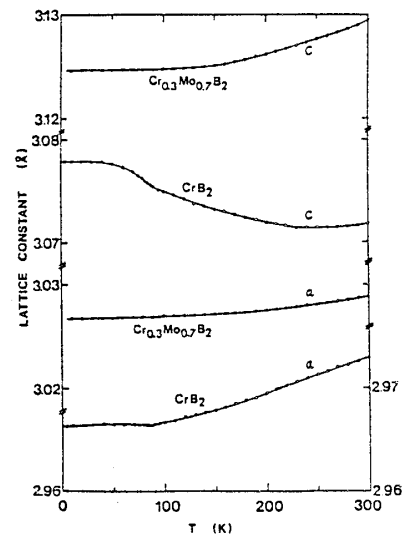


図2. 格子定数の温度変化

### 2.2 体積の温度変化

図4に体積の温度変化を示す。磁気秩序による体積の増加( $\Delta V/V$ )は  $\text{CrB}_2$  で 0.085% である。

体積変化より求めた  $\text{CrB}_2$  と  $\text{Cr}_{0.3}\text{Mo}_{0.7}\text{B}_2$  の熱膨張係数の温度変化を図5に示す。 $\text{Cr}_{0.3}\text{Mo}_{0.7}\text{B}_2$  の温度変化は、実際に示したデバイ温度 ~850 K のデバイ比熱関数の変化でほぼ合わせることができると推定される。

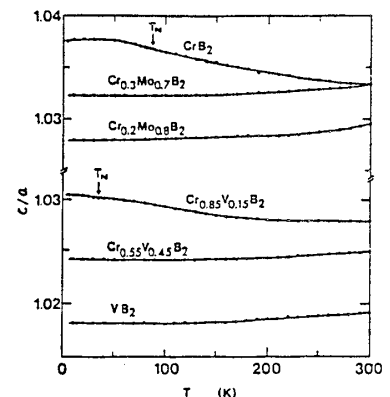


図3.  $c/a$  の温度変化

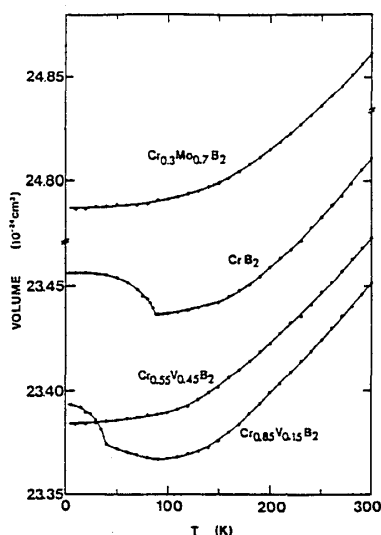


図4. 体積の温度変化.

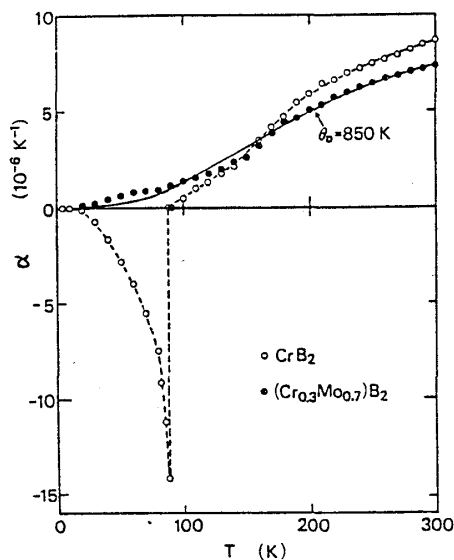


図5. 熱膨張係数の温度変化.

### 3. CrB<sub>2</sub>の磁気体積効果

図5からCrB<sub>2</sub>の磁気体積効果を求めるため、Cr<sub>0.3</sub>Mo<sub>0.7</sub>B<sub>2</sub>の熱膨張係数を非磁性の寄与と仮定して両者の差をとると、図6のようになる。Cr<sub>0.85</sub>V<sub>0.15</sub>B<sub>2</sub>とCr<sub>0.55</sub>V<sub>0.45</sub>B<sub>2</sub>との差をとったものも、 $T_N$ の差を除くと、常磁性温度領域ではCrB<sub>2</sub>の結果とほぼ同じになる。

熱膨張係数に対する磁気的な寄与は、 $T_N$ で大きな負のピークをつくった後、 $\sim 150$  Kで正となり $\sim 200$  K以上では一定値 $\sim 1 \times 10^{-6} \text{ K}^{-1}$ となる。常磁性温度領域でのこの大きさは、弱い強磁性体MnSi<sup>(1)</sup>における $2.5 \times 10^{-6} \text{ K}^{-1}$ 、ZrZn<sub>2</sub><sup>(2)</sup>における $\sim 1 \times 10^{-6} \text{ K}^{-1}$ 等とほぼ同じ程度の大きさである。

スピンのゆらぎの理論的結果<sup>(6)</sup>から予想されるように、遍歴電子反強磁性体CrB<sub>2</sub>では、 $T_N$ 以上の常磁性領域でも、正の磁気体積効果が存在することがわかる。

#### 参考文献

- 1) M. Matsunaga, Y. Ishikawa and T. Nakajima: J. Phys. Soc. Jpn. 51 (1982) 1153.
- 2) S. Ogawa: Physica 119B (1983) 68.
- 3) G. Creuzet, I. A. Campbell and J. L. Smith: J. Phys. (France) 44 (1983) L547.
- 4) K. Suzuki and Y. Masuda: J. Phys. Soc. Jpn. 54 (1985) 630.
- 5) S. Funahashi, Y. Hamaguchi, T. Tanaka and E. Bannai: Solid State Commun. 23 (1977) 859.
- 6) T. Moriya and K. Usami: Solid State Commun. 34 (1980) 95.

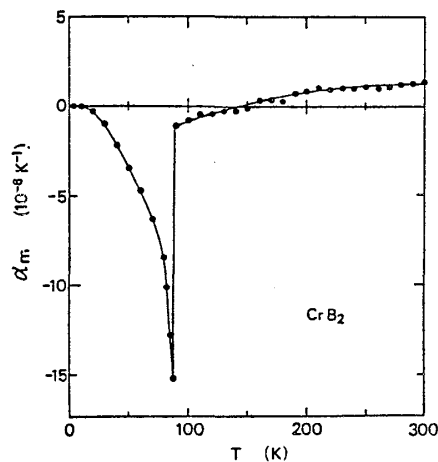


図6. CrB<sub>2</sub>の熱膨張係数に対する磁気的な寄与.